



▲新版 1年P1  
1年冒頭のページ。平仮名「あ」「さ」の空書きをし、楽しく書写の学習をスタートさせます。

- るにつれて増える「書写嫌い」の実態があります。自分の書く文字に劣等感をもつ、書写の時間の意義を見いだせないなどといった理由から、だんだんと書くことへの興味・関心が薄れる子が多くなっています。そんな子どもたちに、書くことの楽しさを伝えたいという思いから、教科書の編集がスタートしました。
- このような子どもを育てるには、まず、相手や目的、場面に応じて書くための確かな技能を定着させる必要があります。これは、自分の文字に自信をもつために不可欠なことです。そして、技能の定着のためには、さまざまな体験を通して、文字を書くことの楽しさや価値を実感できるようにすることが重要です。
- 新版の編集にあたっては、子どもたちの意欲を喚起する紙面や学習活動を位置づけるのもちろんのこと、子ども自身が主体的に考えて取り組み、力を発揮し、何かが身についたときに得られる充足感や達成感、つまり書くことの「楽しさ」が実感できる教科書を目指しました。
- この考え方をもとに掲げたのが、次のコンセプトです。
- ① 基礎・基本が、自然に身につく教科書
  - ② 書写の力が、日常に広がる教科書

# 書くことが、好きになる。

平成二十七年年度版『書写』のご紹介

新しい『書写』教科書が完成しました。どのような思いや意図が込められた教科書なのでしょうか。代表編集委員の宮澤正明先生に、その魅力について語っていただきました。



## はじめに

――目ざした子ども像

新版の編集会議は、「六年間の学習で目ざす子ども像」について話し合うところから始まりました。そこから生まれたのが、次のような子ども像です。

自分の文字に自信をもち、進んで文や文章を書くことのできる児童

この子ども像の背景には、学年が上がるにつれて増える「書写嫌い」の実態があります。

みやざわまさあき  
宮澤正明  
山梨大学大学院教育学研究科教授。都留文科大学、大東文化大学、および二松学舎大学大学院講師。1952年、静岡県生まれ。光村図書 小・中学校書写教科書の代表編集委員、高等学校書道教科書の編集委員を務める。著書に、『新・字形と筆順』（光村図書）など。



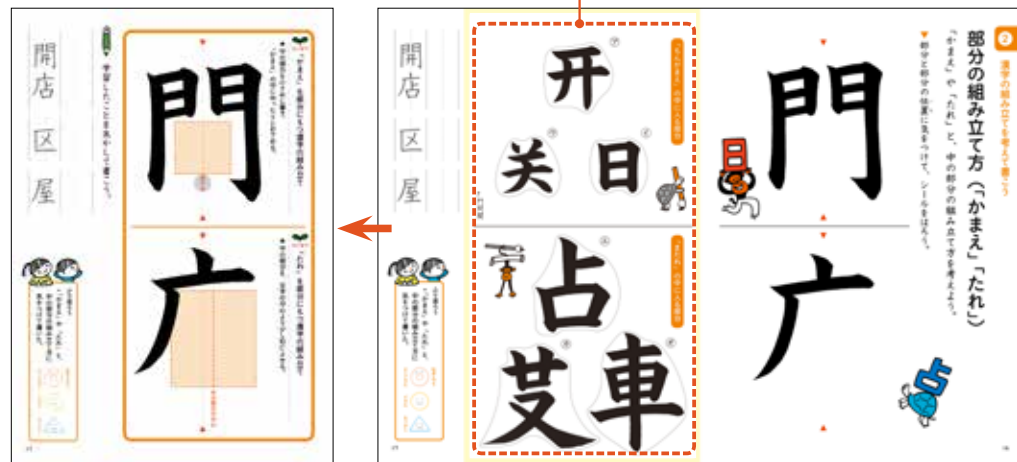


▲新版 1年P10-11



子どもの指の太さに合わせて新しく作った、なぞり書き用の文字です。文字の太さやキャラクターの動きで、「払い」の書き方を直感的に理解できます。

弱粘性のシールなので、繰り返し貼ったりはがしたりしながら、漢字の部分の組み立て方を体感することができます。



▲新版 4年P16-17

書写は、技能教科です。頭では分かっているけど、それを思いどおりに形として表すことができれば、目標が達成したといえます。そのための技能が必要なのです。技能を高めるためには、実践が求められます。ですから、書写の学習において、自分で体を動かして文字の形を理解し、覚えることは非常に重要な意味をもちます。新しい教科書では、それを促す工夫を豊富に用意しました。

例えば、低学年では、なぞり書きや空書きなど、体感しながら理解を深める学習活動を多く位置づけています。新しく作ったなぞり書き用の文字によって、子どもたちは、「止め」「はね」「払い」などといった筆使いを直感的に捉えることができるようになっていきます。

また、四年には、シールを使って、漢字の部分の組み立て方を考える教材を設けました。「かまえ」や「たれ」をもつ漢字は、わずかな位置の違いで、文字としてのバランスが大きく変わります。貼ったりはがしたりしながら、自分でシールを動かし、そのことを実感できる教材になっています。

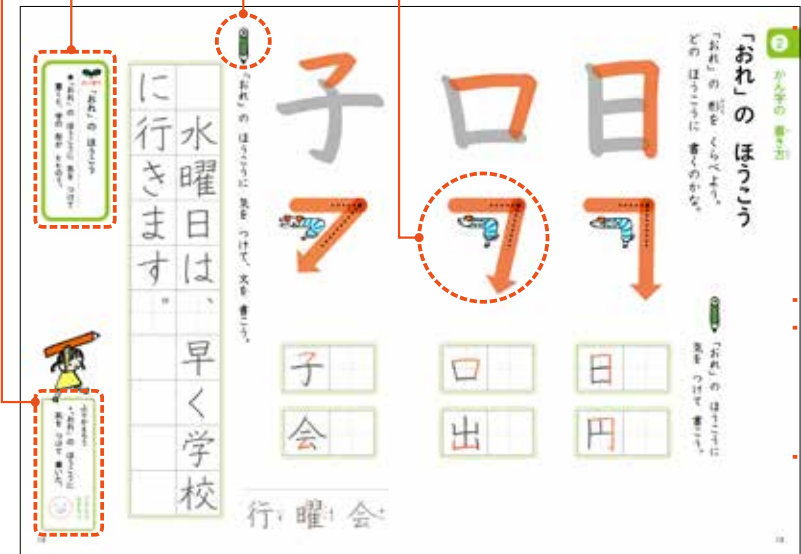
**ポイント**  
**体感的・直感的に理解できる**

学習の成果、知識・技能の定着を確認できる「振り返ろう」。

光村図書『国語』教科書でも使われている「たいせつ」を設け、学習のポイントがひと目で分かるようにしました。

活動の内容がひと目で分かるマーク。

子どもたちの理解を助け、課題解決のヒントを与えるキャラクター。



主たる学習内容は、紙面上部に大きく表示しました。

関連事項は、紙面下部に表示しました。

◀新版 2年P12-13

**[現行版]**



**[新版]**

基礎・基本が、自然に身につく

**ポイント**  
**学ぶことがひと目で分かる**

限られた授業時間の中では、学習効率よく進めていくことが求められます。子どもの側に立つても、「あれもこれも」と、一度に多くのことを学習するのは難しいでしょう。ですから、発達の段階に応じ、学習要素を焦点化する必要があります。

新しい教科書では、六学年すべての教材について、いちばん大切なことは何なのかを見直し、厳選するとともに、その示し方を工夫しました。

例えば、二年の「折れ」の方向についての学習。ここでは、横から縦方向への三つの「折れ」の方向の違いを大きく示し、その他の事例を下部に小さめに示しました。これにより、「折れ」の方向の、象徴的な違いを押さえることができます。現行版に比べ、大切なことがひと目で分かるようになりました。

ベテランの先生にとっては、ご自身のアレンジがしやすく、そうではない先生にとっては、指導事項がひと目で把握でき、授業が組み立てやすい紙面になっています。どのような先生にも、活用いただけるはずです。

▼新版 3年P16-17



国語と連動していることを示す「国語」マーク。

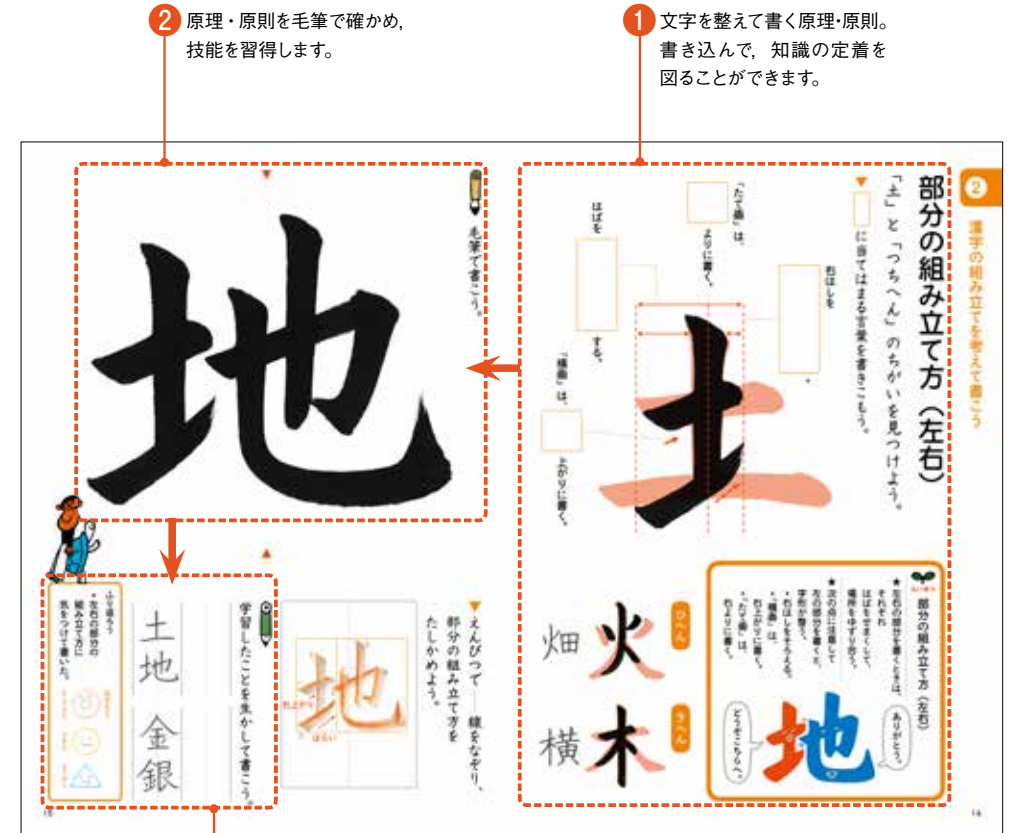
▼光村図書 国語教科書 新版 3年上P83



国語と一体的に扱えるよう、学習内容・題材・学習時期を一致させた教材を設けています。国語と連動させることで、学習活動への必然性や授業の時間配分に余裕が生まれます。



▼新版 4年P36-37



▲新版 4年P14-15

2 原理・原則を毛筆で確かめ、技能を習得します。

1 文字を整えて書く原理・原則。書き込んで、知識の定着を図ることができます。

3 他の文字への応用という実践的な硬筆学習によって、習得した知識・技能の定着を図ります。

書写の力が、日常に広がる

ポイント「書写が役に立った」と実感できる

▼ねらいと流れが捉えやすい紙面構成

文字を整えて書く「原理・原則」を書写の授業でせつかく学んでも、それが子どもたちの日常に生かされなければ、意味がありません。ですから、毛筆教材の場合、毛筆の後には必ず、日常的な筆記具である鉛筆での硬筆を経て、学習を終える授業展開が望ましいといえます。

三年以上の毛筆教材はすべて、1 原理・原則を理解する→2 毛筆で確かめ、技能を習得する→3 硬筆で技能を定着させるという流れになるよう、紙面構成を工夫しました。この作りは、学習のねらいが分かりやすいという点に加え、学習の終わりに日常的な「書くこと」につなげる授業がしやすいという点でも、使いやすく、学習効果を高める紙面であると思っています。

#### ▼国語との連動

「国語科書写」ということから分かるように、国語の学習とのリンクは特に大切にしたいところです。新しい教科書には、光村図書『国語』教科書と連動させて使うことができる教材が各学年に用意されています。

意されています。書写の授業は、とすると、「言葉」ではなく、文字という記号を書いているという感覚に陥ってしまいがちです。国語と行ったり来たりして学習を進めることは、子どもたちに「言葉の学習なんだな」と意識させるうえでよいことだと、私は思っています。書写は、言語に対する感覚を養う学習の場であってほしいのです。

#### ▼有効に活用できる巻末「資料」

さらに、新版からの新しい試みとして、各学年の巻末に、「資料」というページを設けました。手紙や原稿用紙、新聞など、他教科や日常の書く場面で必要とされる書式について調査し、いつでも参照できるように例を示したものです。先生方には、機を捉えてこれを活用し、書写の学習と子どもたちの日常をつなげていってもらえたらと強く願っています。

「書写で学んだことが役に立った」と実感し、書くことを楽しいと思う。新しい教科書を使って、そんなふうに子どもたちを育てていただけたら、こんなにうれしいことはありません。